

埋文よこはま 8



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成 15 年 9 月 30 日発行

古鶴見湾岸の貝塚

—港北ニュータウン遺跡群『西ノ谷貝塚』報告から—

地球の気候は寒・暖の時期がくり返され、およそ100万年前以後にも4回の氷河期がありました。約2万年前の第4氷期は“ヴルム氷期”とよばれ、日本列島は陸橋でアジア大陸とつながり、ヒトやゾウなどが渡って来ました。

東京湾の海は現在の海岸線よりも150mもしりぞき、浦賀付近が河口の「古東京川」となっていました。

火山活動も大変活発

で、富士・箱根に加えて

九州の始良火山の火山

灰までふりそそぎ、

背の低い樹林や草原に

「最初の横浜人」がおとず

れました。

気候の温暖化

で海の進入がはじ

まり、約6000年前

の縄文時代前期中葉

に鶴見川ぞいの低地は

「古鶴見湾」となりました。

縄文人たちはこの湾沿いの丘にムラ

をつくり、食料とした貝や魚・獣骨

を竪穴住居のあとの凹地にすて、たくさんの貝塚が残され

ました。港北ニュータウンの建設にともない南堀・西ノ谷・

茅ヶ崎・境田・北川貝塚が発掘されました。

西ノ谷貝塚のあらまし

西ノ谷貝塚は都筑区南山田二丁目、早淵川北岸の支谷を

のぞむ標高44mの丘にありました。

1936年に酒詰仲男さんがこの貝塚を初めて発掘しまし

た。縄文時代のイヌの骨を発見して、学界に報告しました。

1973年から86年にかけて、港北ニュータウン埋蔵文化財

調査団が遺跡の全域を調査しました。

その結果、縄文時代早期燃糸文期（9000年前）・前期中

葉（5000～6000年前）・後期中葉（3500年前）、古墳時

代中期（1500年前）のムラ、平安時代前半期（1000年前）の八かが確認されました。

縄文時代前期のムラは竪穴住居50・墓穴5・貝層8か所をかぞえる大規模なもので、黒浜期（古）と諸磯期（後）の2時期があります。貝層はすべて諸磯期のもので住居址の凹地につくられています。茅ヶ崎貝塚や南堀貝塚などのように斜面のところにはまったく見つかりませんでした。

竪穴住居の暮らし

縄文時代の前期中葉の頃の横浜の丘には、

シヤツバキの照葉樹、クヌギヤ

コナラの落葉広葉樹のいり

まじった森が広がって

いました。こうした

場所にムラをつく

るためには、森を

切り開いて広い

平地をつくらな

ければなりません。

するどい刃をも

つ磨製石斧を使って

つくられたオノで木を

切りたおし、力を合わせて

根をとりのぞきます。打製石斧を

つけてつくった道具で地面を細長い

四角に掘りくぼめます。なか

に柱をたてるために穴を掘り、

切り倒して枝をはらった木を

そのなかにさしこみます。そ

して、アシヤカヤで屋根をふ

きます。出入口は東や南側の

壁を開け、奥の方に上下を切

った土器をうずめた炉を設け

ると住居が出来上がります。

数軒の住居は間隔をおいて

環状にならび、その中央に空



西ノ谷貝塚出土の土器 さまざまな大きさや形がある



遺跡の場所



五本柱の竪穴住居址



浅いくぼみとなった住居址に貝がすてられた

間ができます。これを広場とといいます。この広場では作業や集会が行なわれました。広場の一角に亡くなった人がほうむられ、墓地として使われました。

西ノ谷や周辺のムラはどこでもこんな形をしており、住んでいた人数（人口）もせいぜい数十人前後とみられます。

日々の暮らしは周囲の森の木の実やイモなどの植物質食料が中心です。シカやイノシシなどの小動物は、飼いやらしたイヌを使ってつかまえました。

浜辺ではカキやハマグリなどの貝を採り、河口を回遊するコイやスズキを捕獲していました。

季節や資源の状況を知りつくし、自然をたくみに利用した暮らしが続けられていたのです。

くぼみに作られた貝層

縄文前期黒浜期の西ノ谷ムラは、台地の南西部につくられました。この時すでにとなりの南堀ムラでは貝をとり始めていましたが、このムラではそうした様子はみられません。

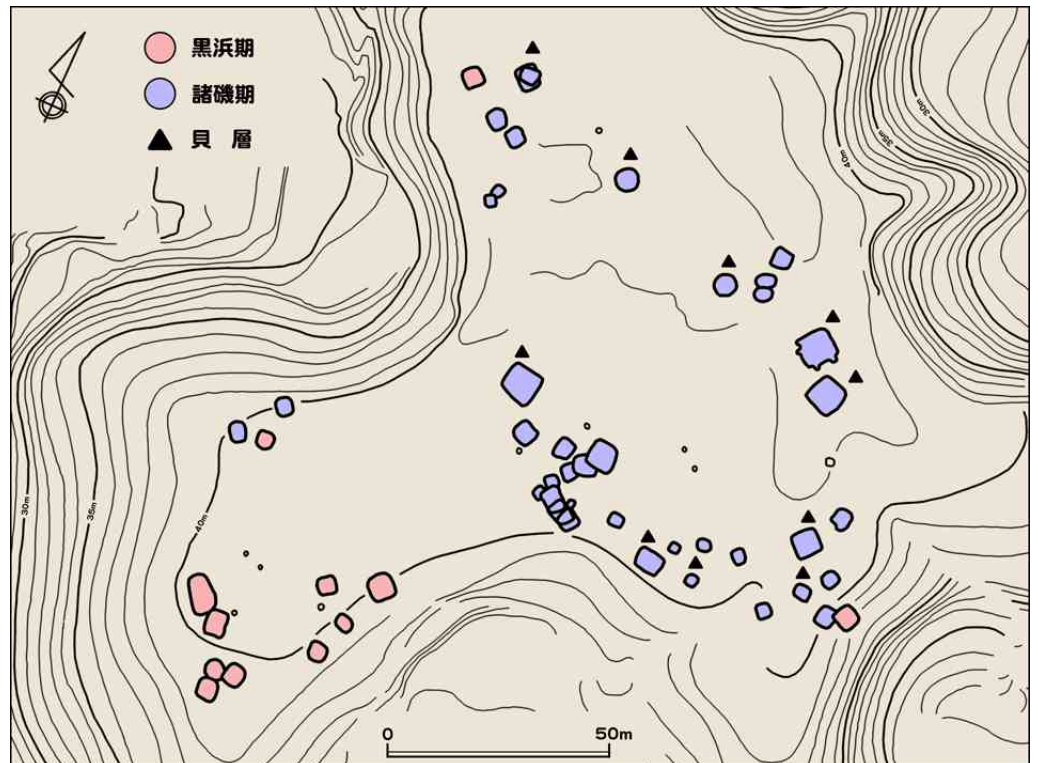
次の時期（諸磯期）は数軒から十軒の住居が台地全体に広がる大きなムラとなり、貝の採集も始めました。貝はカキ・ハマグリ・ハイガイなどが中心です。すぐ前の海辺ばかりでなく、少し遠くの方まで採りにいったようです。

食べた後の貝殻はムラの

まわりの斜面のところではなく、近くの住居のあとにできたくぼ地にすてられました。住居あとの中にはまだ柱の一部が残っていました。そのそばで火を燃やすヒトの行為があったようです。焼けた貝殻があるのはそうした行為による結果とみられます。

さまざまな生活の道具

木の実やヤマイモなどを調理するための道具として、すり石や石皿・くぼみ石などがあります。これらは多摩川や相模川の河原まで行き、使いやすいものを選んでつくりました。シカやイノシシをとる矢じりは、八ヶ岳や神津島こうづしまの黒曜石を入手しました。シカの骨やイノシシの牙も、よい



西ノ谷ムラは初め南西部につくられ（黒浜期）、東半部にうつって大規模となった（諸磯期）



住居の床面にシカ角と加工用の台石



人は石のネックレスをつけて埋葬された

材料です。

木の実のアクぬきや貝・ケモノ肉を煮るために、たくさんの土器がつくられました。粘土でバケツやボウルのような形をつくり、縄目の上にヘラでもようをつけ、たき火で焼き上げ、入れ物や土鍋として使われました。木や竹・草などの道具もありましたが、腐ってしまい残っていません。

となり合わせの生と死

縄文人の出生時死亡率は今日よりはるかに高く、また栄養状態も悪く、平均年齢は30~40才といわれています。死は身近なできごとで、自然のサイクルとして受け止められ

たらしく、より古い縄文時代早期の撚糸文期のムラでは墓が見つかっていません。

前期のムラでは住居の近くに丸い穴を掘り、亡くなった人をほうむっています。なきがらはネックレスやイヤリングをつけたまま、衣服にくるまれ、足をかかえるようにまげて横たえられました。八カの上に標木が立てられ、ここに墓地がきづかれました。西ノ谷ムラの人びとはムラの内部に墓をつくり亡くなった親や兄弟などとともにいつまでも一緒に生活しているという思いの表れとみられます。

わかったこと

古鶴見湾岸には30か所前後の“貝塚ムラ”がつくられました。この西ノ谷貝塚は折本貝塚とならば大きさのムラでした。

これまでムラの全体像は主に南堀貝塚の成果によっていましたが、よりくわしくわかりました。たくさんの貝に比べて魚骨がほとんどなく、近くの茅ヶ崎貝塚や北川貝塚と大きくちがいます。

東海もしくは関西地方からもたらされた土器もあり、この時期の交流がとても広く行なわれていたことをものがたっています。

縄文人が食べた貝

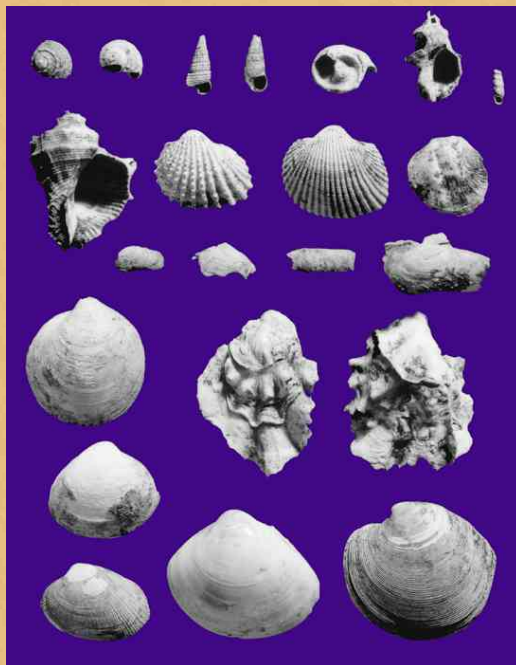
貝層は8軒の住居址から見つかり、うち2か所はまったく手つかずで、合わせて63,000個、40種類の貝があります。

貝の大半は、マガキ・ハイガイ・ハマグリなまぐりの3種でしめられています。マガキは中型で、中には棒付きの痕跡がみられ、半養殖の可能性が考えられました。ハイガイは現在東京湾におらず、当時の気候が3度くらい高かったことをしめします。ハマグリも現在と同じ形で、ふちをギザギザに加工してナイフとしています。

その他に、アサリ・オキシジミ・オオノガイ・カガミガイ・シオフキガイ・サルボウなどの二枚貝、アカニシ・ツメタガイ・ウミナナ・キサゴなどの巻貝があり、他の貝塚でも見られます。

海の微小貝として、シマハマツボ・シラギクガイなど、陸の微小貝として、キセルガイ・ヒメベツコウガイ・ヒメコハクガイ・ミジンマイマイなどがあります。

魚骨はタイ・スズキ・コイで、種類・数が少ない。またツノガイのペンダント・フスマガイの赤彩製品も発見されました。



行ってみよう!

上星川遺跡

保土ヶ谷区釜台町 95

釜台公園内



遺跡へはどう行くの

相模鉄道の横浜から海老名を結ぶ相鉄本線に乗り、上星川駅で降ります。駅の改札口を右側（北口）に階段を下りて、真直ぐ行くと国道16号線に当たります。歩道を渡り、右手に歩きます。やがて釜台町歩道橋が見えて左に保土ヶ谷中学校と釜台公園に続く道の入り口があります。この道はすぐに二股になり、左に保土ヶ谷中学校の校庭の縁に沿いながら行くと階段が見えます。釜台公園はこの階段の上にあります。左手に鉄塔があり、西へ続く階段と道があります。平場がひらけていて、西北の隅に教育委員会の遺跡説明板がすえられています。この釜台公園からルネ上星川にかけての台地上が上星川遺跡です。

上星川遺跡の発掘調査

上星川遺跡は横浜の中央部を流れる^{かたじらがわ}帷子川中流域の左岸にある台地上に立地しています。この台地は帷子川に向かって南に突き出した舌のような形をしています。台地の標高は55mから60mを測ります。

昭和60年の春にここに住宅建設が計画され、市教育委員会による試掘で弥生時代の住居址がみつかりました。そこで夏に相



釜台公園への入り口

武考古学研究所が本格的な発掘調査を行いました。その結果、縄文時代早期後半（およそ7000年前）の土壌2基、弥生時代後期（およそ1800

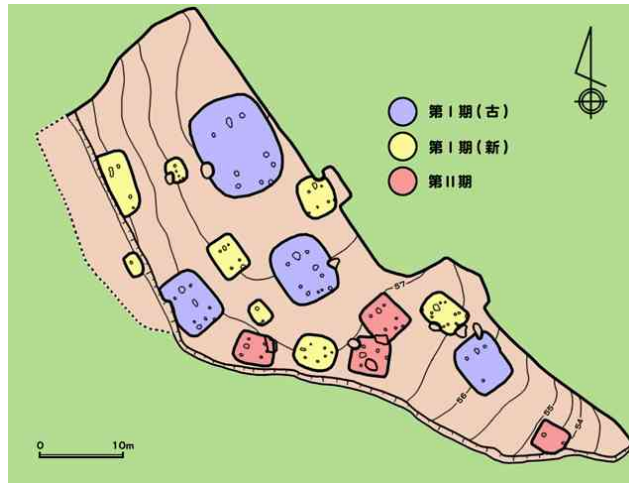


上星川遺跡の説明板

年前）の竪穴住居址16軒が確認されています。遺物は縄文時代早期後半と中期の土器、弥生時代後期の土器、土製勾玉、土製紡錘車などが発見されています。

発掘でわかったこと

上星川遺跡は、調査により弥生時代後期の集落址とわかりました。住居の平面形は隅の円い長方形、長方形、方形をしています。弥生時代後期の久ヶ原式から弥生町式の土器が出ているので、100年から150年ぐらいの間に営まれていました。住居の大きさは多くが長軸4mから7m、短軸3mから6mのものです。特大のものは長軸12m、短軸9.5mも測ります。おそらく一時期に4軒から8軒の住居から構成される集落とみられます。帷子川流域で米作りを始めた頃の人びとの生活を知る上で貴重な遺跡の一つです。



上星川遺跡の住居址分布図

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業のようすを見学できます（予約が必要です）。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋文よこはま 8

発行日 2003年9月30日

編集・発行 財団法人横浜市ふるさと歴史財団

埋蔵文化財センター

〒224-0034 横浜市都筑区勝田町 760

TEL 045-593-2406

FAX 045-593-2403